

## Journal de Trévoux とシャトレ＝メラン論争

川 島 慶 子

人文社会教室

(1994年8月16日受理)

### La Querelle sur les Forces Vives entre Madame du Châtelet et Mairan dans le *Journal de Trévoux*

Keiko KAWASHIMA

Department of Humanities and Social Sciences

(Received August 16, 1994)

En 1742, la querelle sur les forces vives éclata entre la marquise du Châtelet et Dortous de Mairan à cause de l'attaque portée par la marquise dans ses *Institutions de physique* (1740) contre le secrétaire perpétuel de l'Académie des Sciences. Un journal des Lumières, le *Journal de Trévoux*, traita cette dispute; par contre, les autres périodiques scientifiques, et notamment le *Journal des savants*, gardèrent le silence. Le traitement du journal des jésuites nous montre deux points à retenir dans la controverse. Il faut admettre en premier lieu que la querelle sur les forces vives n'est jamais résolue par l'expérimentation et le raisonnement : les deux adversaires parlent souvent des mêmes expériences pour vérifier les principes de leurs partis et pour réfuter leurs opposants. Ici aussi, ce ne sont pas les faits qui choisissent la théorie comme les autres disputes scientifiques. En deuxième lieu il n'existait pas encore de mots qui puissent rendre la discussion scientifique entre un homme et une femme : d'autant plus le *Journal de Trévoux* loue le style de la marquise, d'autant plus il se trouve dans la confusion ou l'embarras à cause du genre de ses discours. Autrement dit, la "nature" des sciences était considérée, à cette époque, incompatible avec celle des femmes, et c'est encore la question vivante de nos jours.

#### 1. 序

1741年8月、啓蒙科学雑誌として名を馳せていた *Journal de Trévoux* (あるいは *Mémoire de Trévoux*) は2週連続で或る活力論争をとりあげた<sup>1)</sup>。それは他の啓蒙誌、とりわけ *Journal des savants* が沈黙した論争、シャトレ＝メラン論争である。すなわち、「[己れの]性を超せしめるその天分と知識により著名<sup>2)</sup>」なデュ・シャトレ侯爵夫人と、パリの王立科学アカデミーの常任書記ドルトゥス・ドゥ・メランとの公開往復書簡による活力論争のことである<sup>3)</sup>。論争の発端は、侯爵夫人が自著『物理学教程』(1740)第21章で、メランの科学理論を批判したことであった。メランはこれに怒り、夫人に公開書簡を出して反論し、夫人もまた公開の返事で応戦した。

デュ・シャトレ夫人の伝記作家でもあり、ヴォルテール研究者でもある R.ワイヨはこの論争に対して「実験

と論争で簡単に決着をつけることができたはず」なのに情念が人を盲目にしてそこに至らなかった論争と形容し、さらにデュ・シャトレ夫人がこの論争によって社交界で成功したことは認めつつも、結局彼女は間違っており「*Mémoire de Trévoux*はこの問題の深層を理解しようとはせずに、彼女の“オネットームな文体”とイロニーの繊細さを誉めたのだ<sup>4)</sup>」という判断を下している。

だがこの批判には疑問が残る。活力論争において「実験と論証」がそれほど確実な武器だったことが果たしてあったのか。いや、活力論争にかぎらず、他の科学論争においてもそんなことがあったのだろうか。活力論争で実験と論証が決定的であったはずだ、という見解は、ガリレオの正しさは望遠鏡をのぞきさえすれば明らかであったのに、無知で迷信深い人間がそうしなかったことにガリレオの悲劇があった、と主張するのに似ている。ガリレオの「見ようとする意志」なくしては、初期の精度の

低い望遠鏡では木星の衛星を見ることなど不可能だった。あの時点で「木星の衛星が見えなかったから」ガリレオに対立した人間のなかには、ガリレオ流に言っても「実験と論証」に基づいて彼に反対した者もいたし、さらに、機械の助けを借りて五感を超えることをみとめず、望遠鏡を見ること自体を拒否したアリストテレス学者らを、単に「非科学的」と決めつけるのも「非歴史的」見方であることは明らかだ。活力論争もまたこの例と同様に歴史的文脈の中で考える必要のある主題なのである。

そして後半のほうの「*Journal de Trévoux*はこの論争を真面目にとりあげなかった」というワイヨの意見も再考の必要がある。ここでは文体への評価からこう結論しているが、メランをけなしデュ・シャトレ夫人の文体を誉めたからといって、このジェズイットの雑誌の態度を「表面的」と見るのは早計であろう。なぜなら次節以下で述べるように、このシャトレ＝メラン論争はこの時期の活力論争としては典型的な論争であったが、他方これはモデルなき新しい論争でもあった。それは「女と男の対等な科学論争」という意味である。従って当然、人々はこの論争を表現するにあたって混乱した。なぜなら当時のフランス社会はこういった関係について表現する適切なコトバを持たなかったからである。

本論ではこのシャトレ＝メラン論争を、当時の啓蒙誌のひとつ *Journal de Trévoux* による取り扱いを通して、フランスにおいて1741年時点での活力論争が科学、哲学上どのような意義を持ったのかを探り、また論争の様式に対するこの雑誌の批評から、特にシャトレ＝メラン論争が「文芸共和国」の人々の目にどのような論争として映っていたのかということの一端を明らかにする。

## 2. 活力論争の変遷と二人の論者 — デュ・シャトレ夫人とメラン

活力論争はそもそもの始まりから、「実験と論証」によって決着がつくようなものではなかった。運動の量と活力がともにニュートンの運動方程式の、時間による積分と空間による積分の解であり、もともとおなじものから来ており、運動する物体のもつふたつの別々の概念である、などという解答は（仮にこれを決着と見なすとして）問題の争点をずらすことによるのみたどりつく結論であり、理性と実験によって必然的に導かれる結論などではなかった。

ライプニッツが1686年にデカルトの命題「神は運動の第一原因であり宇宙の中に常に同じ量の運動を保存している<sup>5)</sup>」に反対した論文<sup>6)</sup>を書いた時、そもそもその、活力論争の根本の方程式たる運動方程式を記した『プリンピキア』（1687）は世に出ていなかった。そしてこの

『プリンピキア』の作者ニュートンと彼の代弁者であるクラークを相手にライプニッツが書簡による論争を挑んだ時も、当のニュートンはこれが自分の運動方程式の積分を巡る問題であるなどとは夢にも思わなかったであろう。彼らにとっては実験結果同様、いやそれ以上に、全能の神にふさわしい形での運動する物体とその運動の保存の有無というのは重大な問題だった。

たとえばライプニッツとクラークの次のようなやりとりからもそれは明らかであろう。

クラークが「この世界は神の干渉がなくとも動き続ける大いなる機械であるという考えは、唯物論及び宿命論者のものであって（神を超世界的叡智として仰ぐという口実で）実際は摂理と神の支配を世界から排除しようとするものです<sup>7)</sup>」と主張すれば、対してライプニッツは「世界内の能動力が自ら減少してゆくと考える人々は自然の主要法則と神の作品の美をよく認識していないのです<sup>8)</sup>」と答えた。

ここでは真理は常に一つしかなかった。正しいのは必ずどちらか一方である。そしてこれはあらゆる論争における論者の主張の常ではなからうか。従って「神の問題」が論争の表舞台から姿を消しても、二者択一という基本的態度は変わらない。個々の論者は自身の実験結果や17世紀および18世紀の同時代の学者らの説を自分の主張の根拠として、同時に敵対者の誤りの証拠として利用した。そしてそこではしばしばまったく同じ実験の数値が使われさえしたのである。従ってこの問題が形を変え、場合を限定しつつ100年近く話題にされたのは、まさに実験と関係なかったからであり、断じて人々の無知のせいではない<sup>9)</sup>。

シャトレ＝メラン論争の起った1741年はしかし、ライプニッツ＝クラーク論争の時代とは形而上学の扱いが大きく違っていた。コストやヴォルテール、モーペルテュイといった学識者らによってフランスに持込まれたニュートンの科学は、ロックの形而上学の支えの下で徐々に王立科学アカデミーの主流概念となりつつあった。自然科学の支えとしての形而上学を重視する傾向はある程度持ちつつも、17世紀のような、自然科学に対する大幅な宗教や形而上学の介入は、精密科学の分野では表向き消えてゆきつつあった。そのことは形而上学とあまりにも分ちがたく結びついていたデカルトの科学理論の衰退を意味した。デカルト的方法はフランス知識人の血肉となり、生き続けたが、個々の科学理論はニュートンの理論にとっかわられつつあった。

活力論争に関しては、ライプニッツがデカルトにもニュートンにも反対したことから解るように、自然科学上ではデカルトとニュートンの理論は類似していた。形而上学的大前提「神は宇宙の創造時に一定量の運動を世界に与え、

それが今まで自動的に保存されている」という点では、むしろデカルトとライプニッツのほうが似ているのに、その保存される力の定義では前者が運動する物体の速さ×重さ（運動の量）、後者が速さの2乗×重さ（活力）としたという違いから、このふたつの理論は別のものと見なされ、デカルトの理論はニュートンの理論、運動する物体の力は運動の量であるが常には保存されない、という説のなかに組み込まれていく。デカルト本人は決してニュートンの理論に納得しないだろうが、フランスのかつてのデカルト科学の推進者らは、活力論争においてはニュートンの支持者にかわっていった。これはまさしく物理的な定義が形而上学的理由より重視されてゆくことの証拠であり、デュ・シャトレ夫人の敵対者メランもこれらのうちの一人であった。

アカデミーの常任書記に就任したばかりの著名な学者であり、パリの哲学的サロンでも当代きっての人気者の一人であったメランは、もともとはデカルト主義の自然科学者であり、1736年のラブランド探検<sup>10)</sup>に際してはカッシーニらと共に、地球の形状はデカルトの渦動理論より導かれる縦長の形であると主張し、探検隊長モーペルテュイの帰還の後、ニュートンの理論の勝利が決定的になってからもなんとかニュートンの万有引力理論とデカルトの渦動理論が折衷できないかと考えたりしたほどであった<sup>11)</sup>。従って1741年の論争の時点では、彼は手紙の中では自分をニュートン派と規定するが、やはりデカルト的な傾向を持っていた。メランは運動する物体について考える時でも、静力学的な「力のつりあい」の理論をモデルにしており、そういった枠の中で運動の量を考えていた<sup>12)</sup>。

対するデュ・シャトレ夫人は、ラブランド探検時は熱狂的なニュートン主義者を自任しており、愛人ヴォルテールと共にニュートン科学のフランスにおける啓蒙推進派として名を馳せていた。それだけに、そのニュートンが敵視していたライプニッツの活力を、運動する物体の力の基準だと夫人が公言したことは周囲の人々にとって大きな驚きだった。したがってこの論争は“元デカルト主義者、現ニュートン主義者のアカデミー会員”対“元ニュートン主義者、現ライプニッツ派の、当代きっての才女”の科学論争であるという見方をされた。そしてこれまた有名人であった『哲学書簡』の作者ヴォルテールが前者の友人で後者の愛人であることから、いやでも人目を引くものとなったのである<sup>13)</sup>。

次の2つの節では、*Journal de Trévoux*によるこの論争のとりあげかたについて、自然学的問題（第3節）、論争の様式に見るジェンダーの問題（第4節）の両面から考察してゆきたい。

### 3. *Journal de Trévoux* とシャトレ＝メラン論争の自然学的争点

*Journal de Trévoux* は、ルイ14世の庶子メーヌ侯をパトロンとして1701年に、トレヴーの地でコレージュ・ルイ・ルグランのジェズイット僧達を中心になって発刊した啓蒙誌である。1741年の時点ではメーヌ侯（1730年死去）の息子ルイ・オーギュスト・ド・ブルボンを新たなパトロンとしてトレヴーを離れてパリで印刷されていた。この雑誌は、副題を「諸科学と芸術の歴史の為の紀要 (*Mémoire pour l'Histoire des Sciences & des Beaux Arts*)」とすることからも解るように、1665年に創刊された、王立アカデミーおほかえという感のある雑誌 *Journal des savants*<sup>14)</sup> に対抗する雑誌でもあった。したがって *Journal de Trévoux* の扱う範囲は自然学、医学、技芸、神学、文学、論理学、歴史学その他、*Journal des savants* 同様多岐にわたっていた。*Journal de Trévoux* の編者たちは、ヨーロッパで発表された様々な分野の学問の成果を、広く公平に啓蒙するという目的を掲げていたが<sup>15)</sup>、基本的にはキリスト教の擁護という原則を崩さず、これがのちに百科全書派との対立を生むのは有名な話だが、我々が問題としている1741年の論争に関しては、デュ・シャトレ夫人、メラン双方の手紙が神の問題に触れてないので、宗教色はないといってよい。

この二人の手紙に関する二つの記事は大部分これら公開書簡の抜粋と要約から構成されており、所々で編集者の感想を述べるという形式である。したがって書簡全体の要約というより、雑誌がそれぞれの書簡のなかで興味深いと見た所を抜きだして解説している、と考えてよいであろう。

直接の引用箇所はデュ・シャトレ夫人、メランの記事それぞれ7箇所ずつあるが内容毎にわけると3つずつになる。侯爵夫人の手紙では1)メランの理論の間違いを所持金とそれで買うことのできるダイヤの数で表現した例え話、2)一様減速上昇する（投げ上げ）物体の力の定義、3)ヘルマンの衝突実験による活力の証明、である<sup>16)</sup>。メランの方では4)ヘルマンの実験をむしろ運動の量の証拠としてとらえなおした解説、5)斜め同時衝突する3つの物体の運動の量の保存、6)「運動の量」派から見た両者の自然に対する基本的態度の違い<sup>17)</sup>となっている。

つまりこの雑誌の読者が二つの記事を読んだ時、直接比べてみる事ができるのは3)と4)のヘルマンの衝突実験に対する二人の論者の意見の違いである。まず、この同じ実験を二人がどのように自分の派に有利に解釈しているかこの雑誌の記事に沿って見てみよう。

ヘルマンはライプニッツと親交のあったスイスの自然

学者であり、活力派であった。従ってデュ・シャトレ夫人は当然これを活力の保存の証明実験としてベルヌイラの実験と共に『物理学教程』の中で紹介している<sup>19)</sup>。実験のあらましはこうである。重さがそれぞれ1, 3, 1であるA, B, Cの3つの弾性体の球があり、まずAが速さ2で、静止しているBに衝突し、Bは速さ1を得る。Aはこれによって反対方向に速さ1ではじきかえされ、静止しているCにおつかり、Cは速さ1を得てAは静止する、というものである(この間A, B, Cはすべて等速運動をすると考える)。ヘルマンら活力派の見解では、もし運動の量を保存される力と見るなら奇妙なことになる。つまりはじめAがもっていた力は重さ×速さ(1×2)で2となり、BとおつかったあとはAの力(1×1)とBの力(1×3)を足すと4になる。AがCに衝突した後も同様である。はじめに2しかなかった力が4にふえてしまうので、保存は成り立たない。ところが力を活力とすると当初のAの力は重さ×速さの二乗(1×(2×2))で4となり、第一の衝突の後にはAの力(1×(1×1))+Bの力(3×(1×1))で4となる。第二の衝突の後も同様で力は常に4で保存される。従って保存されるのは運動の量ではなく活力である、というのが活力派の主張であった。以上からも解るようにここでは運動の量はスカラーとして解釈されている。

*Journal de Trévoux*も上の実験のあらましをメランの手紙に沿って手短かに説明したあと<sup>20)</sup>、そのすぐあとに続くメラン自身の見解を抜粋している。メランによるとこれではなによりもまず数値の与えかたがまぎらわしい、というのである。2+2も2の二乗も2の2倍も4になる<sup>20)</sup>。彼はこの実験に別の数値を当ててみることを提案するのであった。始めにAに2のかわりに4の速さをあたえる。すると第一の衝突のあとBの速さは2となり、反対側にはねかえるAの速さも2、それとおつかるCの速さも2になる。これだと上のやり方ではAがはじめにもっていた運動の量は1×4で4になり、第一の衝突のあとは(3×2)+(1×2)=8、2回目もやはり8になる。活力では1×(4×4)で16になるのだらうとメランは語る。しかしこれでは何の証明にもなっていない。この計算では運動の量はスカラーのままだから保存されずにやはり増加してしまう。

そこで雑誌はこの、活力派が自分たちに有利と見た実験をメランがいかなる「注目に値すると思われる普遍的考察」でもって運動の量派の正しさを証明するのに利用したかを、3点に絞って要約している。とりわけここで争点になるのは2番目の提案であった。それは次のようなものである。

2. これらの例[始めの数値の方]では実際上は衝

突前と後で2の力しか存在していません。というのも物体Bに属する正の量の力から、物体AあるいはCがもつ負の量の力を減じてやればいいのです。そしてまた、物体の、または同様の重さの共通中心の移動のみを考えればよいからです<sup>21)</sup>。

つまりこの工夫、負の記号の導入によって、一見成立しないように見える運動の量の保存が証明されるのである。

しかしこの言い分は活力派からみればとうてい受け入れられないものである。従って侯爵夫人は当然、返事の中で反論した。雑誌はメランのこの部分と呼応するデュ・シャトレ夫人の主張の抜粋を載せている。彼女はまず、自分の活力の計算が(2×速さ)×重さであるとするメランの指摘は完全な誤解であることを明言したあと、その証拠としてメランの提案する新たな数値でのヘルマンの衝突実験を活力に従って計算してみせ、活力の保存を強調している。始めの速さを4とすると「衝突後の力は16になるでしょう。つまり速さ4で衝突する物体Aの速さの二乗は16ですし、これに重さの1をかけると16ということです。従って、あなた[メラン]がヘルマン氏に反駁しようとして選んだこの場合においても、活力の保存は確かめられます。これらの物体にどんな速さや重さを与えてもつねにそれを見出すでしょう。かくしてこの、ヘルマン氏の例は全然特殊でもなく、むしろ普遍的なのです<sup>22)</sup>」。

ここでのデュ・シャトレ夫人の言い分はもっともで、メランは負の記号の導入によって、それを使うことを認めるなら運動の量の保存を証明しているが、活力の非保存は証明していない。活力側がこの説明に納得するはずがなかった。また、負の記号についても、活力側はライプニッツ同様これを認めなかった。負の記号導入のいきさつについては、*Journal de Trévoux*が解説している。デカルト派のように全部正の記号で考えると、例えばヘルマンの実験では力が保存されるどころか増加してしまう。これでは“永久運動”なるものが可能であるというパラドックスに陥る。この困難に対しては「学問的であると同時に巧妙な解決法」を見つけたのはマルブランシュやその他の人々であったと述べ、これが「メラン氏の手紙にあるような、プラスとマイナスの記号という代数的区別に存する。しかし、この小さからぬ困難をうまく切り抜ける、きわめて好都合な、大抵の学者らが受け入れていた方法は、活力側の学者にとっては全くもって満足のいくものではなかった。そしてデュ・シャトレ侯爵夫人もこれに満足しようとはしない<sup>23)</sup>」と述べている。そののち、彼女がこの方法に対する軽蔑をあからさまに述べている部分の抜粋が後に続く。

実際なんて驚くべきことでしょう。あなたが物体Aの力を表現する数値の前につけた、この小さい棒 [マイナス記号] の安直さ。それでもあなたが求めるような、4になるかわりに、あなたの計算によってすら8になってしまうこの力から引くのですから。けれどもお願いですから教えてくださいませ。このマイナスとかいう記号が、この引き算が物体AとBからそれらの持っている力の幾分かを取り除くのかどうかを。また何かの障害物にこれらの物体の及ぼす効果が、負となったりするのかどうかを。あなたは確実にそのことを考えてはいらっしゃる。こんな風に考えられるとしたら、500や1000の力ではねかえってきたりする物体なんてものに出くわす破目になるなんてことを、あなたが望んでいらっしゃるとはとうてい考えられません<sup>24)</sup>。

*Journal de Trévoux*はこの、マイナス記号なんてはじめて聞いたと言わんばかりの侯爵夫人の態度に対して、この記号の話を彼女が知らないはずがないと判断している。つまり雑誌の解釈では、ここでのデュ・シャトレ夫人の態度は見せかけであり「知らないふりをしている<sup>25)</sup>」というものである。しかし編者は結局、力の保存に関してはどちらが正しいとも言わない。どちらの記事でもヘルマンの実験に対する双方の言い分を引用し、要約しているだけである。

実際の往復書簡ではデュ・シャトレ夫人の『物理学教程』第21章の内容、特にアカデミーの紀要に載ったメラン自身の論文<sup>26)</sup>に対する夫人の批判を中心に手紙のなかでメランがこれにいちいち運動の量の立場から反駁して、こんどはそれを夫人が返事で再反論している、という形になっている。さらに、それらの話題の中で、メランが一番憤り、つよく反撃したのは、自分自身の論文に対する侯爵夫人の容赦のない批判であった。それは記事では抜粋<sup>2)</sup>の部分、つまり投げ上げの問題<sup>27)</sup>であり、これは1)の例え話の具体例である。しかし先に見たように *Journal de Trévoux* の編者がとりあげた話題の中で両者に共通しているのは、このヘルマンの実験だけであとの話は両方の言い分をのせてないので、雑誌の読者としては片方の主張だけを一方的に読まされるということになっている。

だが、ここまでの *Journal de Trévoux* の記事の内容から、ひとつだけ明らかかなことがある。この論争が「実験と論証」で明らかにできたはずだという序で引用したワイヨの主張が不適切であるということだ。ヘルマンの実験の話で解るように、実験の数値自体にどちらかが異議をとらえているわけではない。これは実験結果の読み間違いや数値の詐称、器具の不備などによって生じる問

題ではなく、明らかによって立つ理論の差から生じる問題である<sup>28)</sup>。さらにここではもはやライブニッツやデカルト、ニュートンという名も個々の理論の上では実際的な意味をもっていない。例えばニュートン支持を自認するメランの説は、運動の量が保存されない場合もある、としたニュートンの見解に沿ってはいない。メランは力の「保存」を常に前提にしている。

マイナス記号にしても、スカラーで考えるデュ・シャトレ夫人がこれを理解しないのはある意味では当然で、活力の立場に立つ限り、「方向」という概念が「保存される力」と関係があるという地点には至らないであろう。その為には「どちらか片方だけが正しい」という考えを捨て、運動の量と活力という2つの別々の概念がある、という発想とともに、ベクトルという概念を導入する必要がある。しかしこの時代は「今日ならば、実数やベクトルなどによって表現される広義の『量』の概念も、ひいては『関数』の概念も、すべてはまだ誕生以前の状態<sup>29)</sup>」であったのだからそれを望むのは難しい。

*Journal de Trévoux* はどちらにも軍配を上げない。それぞれの言い分を紹介するのみである。しかし、このおなじヘルマンの実験に対する二人の論者の記事を読む時、われわれはこの、100年の長きにわたって続いた論争の問題の根深さを見るのである。

#### 4. *Journal de Trévoux* の表現に見る科学論争とジェンダー

前節で見たように *Journal de Trévoux* は、この活力論争の自然科学的内容については(形而上学的内容についても)決着をつけようとはしていない。Article LXVIとLXVIIはいわば二人の論者の意見の紹介であり、雑誌は中立の立場をとっている。そのことがワイヨをして、この雑誌は「問題の深いところを理解しようとしていない」という判断を下すにいたった理由のひとつでもある。その同じページでワイヨは、「興味深いことに、デュ・シャトレ夫人は間違っていたにもかかわらず、この論争のおかげで科学的というより文学的な評判をとったのである<sup>30)</sup>」と述べている。「間違っていた」というのが具体的に何を指すのか不明だが、もしも自然科学上のことならば、ワイヨのこの判断はおかしい。というのもデュ・シャトレ夫人の活力の説明は活力派としては典型的なものであり、この時点でどちらが正しいとは言えないからである。相手の言い分をみとめないという点ではデュ・シャトレ夫人もメランも同じであり、どちらの批判も相手方の論点を決定的に叩けてはいない。議論はどこまでも平行線なのだ。*Journal de Trévoux* はここを問題にはしなかった。

しかしそのかわり、「文学的」な面においては、この雑誌ははっきりと優劣の判定を下したのである。それは社交界での評判と合致していた。ジェズイットの雑誌は、この論争の「文体」に関しては、アカデミーの書記より侯爵夫人に軍配を上げたのであった。

そもそも記事の長さからしてメランの手紙とデュ・シャトレ夫人の返事を扱った Article LXVI と LXVII の長さが、前者は9ページ、後者は13ページとずいぶん違っている。もとの2書簡の長さはほぼ同じであるから、明らかに扱いは後者の方がいいである。実際メランに関する記事はほとんど抜粋と要約からなっており、雑誌自体の見解や判断というものはないといってよい。だから Article LXVI だけ独立に見ると、メランの手紙の単純な内容紹介でしかない。しかし Article LXVII と並べてみると全く違ったことが見えてくる。「この返事の日付は1741年3月26日<sup>30)</sup>である。これは学問と論争にかかわる事柄においてはきわめて迅速な行動である<sup>31)</sup>」で始まる *Journal de Trévoux* の Article LXVII には、至る所に侯爵夫人のフランス語表現の素晴らしさ、論争の様式のスマートさが強調されている。

これはデュ・シャトレ夫人に対する賞賛であると同時に、メランに対する批判ではなからうか。メランに対するけなし文句は一つもないが、*Journal de Trévoux* は侯爵夫人の手紙の表現を持上げることで、暗にメランを批判しているのは誰の目にも明らかである。この雑誌はアカデミーの常任書記たるメランの説に異議をとねえもしないし、著名な社交界の婦人たるデュ・シャトレ夫人の紹介した、ライプニッツやベルヌイ、ヘルマンといったフランスの外で活躍した外国人学者らの説に賛成もしなかったが、後者の態度を誉めることで、前者と、この論争に沈黙している他の啓蒙誌、とりわけ前者の属するアカデミーを背景にもつ *Journal des savants* に対抗する意図を表明したのではなからうか。

事実デュ・シャトレ夫人自身も *Journal des savants* その他の雑誌が、社交界では十分話題になっているこの論争をとりあげないのを不服としていた<sup>32)</sup>。残念ながら彼女が *Journal de Trévoux* のこの記事をどう思ったかという手紙は残っていないが、もしこれをきっかけに自分の書いた『物理学教程』がさらなる評判をとれば、と思ったことは間違いないだろう。そんな彼女の野心はジェズイットの雑誌もよく知っていた。編者は、かのフォントネルのあとを継いでアカデミーの常任書記となったばかりのメランを「今後自分もその仲間の内に数えられる光栄に浴したいと、デュ・シャトレ侯爵夫人が願っているような<sup>33)</sup>」学者らのひとり、と定義することで、当時のメランと彼女の地位との差と、夫人の野心の両方を正確に表現している。

そうしてこの差、学問における社会的な地位ではアカデミー会員とアマチュアであり、上流社会のなかの男と女という違いが、記事の誉めかたに微妙な陰影をもたらしている。とりわけ後者の影響が大きい。というものこの場合前者は後者にとりこまれてしまうからだ。デュ・シャトレ夫人は実力がないからアカデミー会員になれなかったわけではない。性差によってはじめからその門戸が閉ざされているのだ。したがってこれがもし、例えばヴォルテールとメランとの間の論争だったらという問題とは完全に区別する必要がある。なぜならあの場合ではヴォルテールは自主的なアマチュアだからである。以上の視点から *Journal de Trévoux* のデュ・シャトレ夫人に対する「誉め言葉」を見てゆこう。

先に引用した始まりのことばのすぐあとにつづく部分はこうなっている。

[メランの]手紙と同じく、[デュ・シャトレ夫人]の返事のなかにも、前置きの議論がある。というのもデュ・シャトレ侯爵夫人は推論には推論をもって、エスプリのある表現にはエスプリのある応答でもって、礼儀には礼儀で、いかなることにも反論せずにはすませていないし、この、ちょっとした利発な表現を語らずに何事もすまずということがない。これは「フランス的表現」と呼ばれるものだ。なぜならそれは、礼節のいかなる言回しにも逆らわず、ほのめかしだけで理解するような読者のために書く、機知に富んだ礼儀正しい人の話を引き立てる表現であり、われわれの慣習やしきたりと完璧に調和しているからだ。いにしえの人々はこの表現をイロニーと呼んだが、この人達にはある種の繊細さが全く欠けていた。その繊細さがあればイロニーを使用する人の品格にとげとげしさや辛辣さが全くないときに、この表現はわれわれの内では魅力あるものとなるのである<sup>34)</sup>。

この「辛辣」ということに関しては侯爵夫人自身も友人たちに手紙で「とげのあることを最初に言いたしたのは私ではありません。『物理学教程』の中には彼[メラン]に対する礼儀と、彼の誤謬推理に対する道理のある説明があるだけです。けれども彼の手紙には私に対するとげとげしいことがらしかなく、彼にとって正しいことは何もないのですから<sup>35)</sup>」というようなことを訴えている。ここでのデュ・シャトレ夫人の自分に対する評価はおくとしても、メランの手紙がとげとげしいことは事実である。当時ビュフォンやレオミュール、フォントネルらと並ぶ大学者と見なされていたメランにしてみれば、一介のアマチュア女性の正面きつての反論は、たとえそのうしろにある理論がライプニッツやベルヌイといった

一流の学者のものであるにしても、彼のプライドを著しく傷つけた。メランの公開した手紙には社交人としての礼節に欠けるところがあった。*Journal de Trévoux* はここを突いたのである。

Article LXVIIの最初の部分ではデュ・シャトレ夫人のフランス語の表現の巧みさが指摘されている。雑誌は一応二人の論者を「二人の輝かしいライバル<sup>37)</sup>」とか表現して同等に扱っているものの、メランの記事であるArticle LXVIにはそんな部分は全然ないことを心にとめておく必要がある。そしてこういう「フランス的」なもの例として記事は真っ先に、デュ・シャトレ夫人の前置きの話の中から次のような部分を引用するのである。これは侯爵夫人も「笑いによって真実を述べることを何が禁じえようか<sup>38)</sup>」とことわって始めている話で、例え話である。要約すると、手元に4万フランある人は、1万フランのダイヤモンドを4つ買うには十分であるが、この同じ金額で同じダイヤを6つ買えないのは明白である。しかるに「あなた[メラン]は、この人は[ダイヤを4つ買った時点では]2万しか持っていなかった。なぜなら買ってない2つのダイヤは2万にしかならないから。そしてこの買ってない2つのダイヤがその人の使い切のお金であり、所持金を測る尺度となり、その人の買った4つのダイヤではないということを受け入れるのでしょうか<sup>39)</sup>」と夫人はメランを皮肉るのであった。つまりこれはそのすぐあとに彼女の返事のなかで述べられるメランへの批判、彼の投げ上げ運動における力が「進まなかった距離」によって測られることのこっけいさを比喩で表現しているのである。デュ・シャトレ夫人は活力派であるから当然、等減速上昇運動する物体の力はその物体の上昇距離に比例すると考える立場である。

*Journal de Trévoux*はこの話とあとにつづく侯爵夫人の説明を「文学的<sup>40)</sup>」と誉めたが、じつはデュ・シャトレ夫人自身は後にこの比喩を不適切と判断したと考えられる。というのも夫人は1741年にこの手紙を始めて公開した後、彼女の生前にメランの手紙と自分の返事を一緒にして1742年と1744年の2度にわたって印刷させている<sup>41)</sup>。1742年の分は1741年の初出と同じだが、1744年版では彼女はこの例え話をきれいさっぱり削っているのである。1744年版は、彼女が1737年にアカデミーに出した懸賞論文の、火の性質と伝播に関する論文を活力の考えにそって書き直して[1737年にはこの問題に関してもニュートン派であった]出版したものであり、メランとの往復書簡はこの論文の付録としてついている。彼女はこの本を自信作と見たのか、あちこちに配っている<sup>42)</sup>。つまり3年たって「火の論文」と「返事」を書き換えるにあたり、この部分は不用と見たのであろう。もともとの「返事」でも、このダイヤの話のあとで(次は)「もう少し

真面目な事柄について見てみましょう<sup>43)</sup>」と、自分でここはあまり真面目でないと認めている。*Journal de Trévoux*がここを誉めたことを夫人が知らなかったというのは考えがたいので、侯爵夫人はこの誉めかたもまた、不適切と見たのではなかろうか。

ここ以外で表現を非常に誉めているところは、先の節で引用した、デュ・シャトレ夫人のマイナス記号に対する批判である。すでに見たように夫人は返事の中でこの記号を、「小さい棒<sup>44)</sup>」と呼んで嘲っている。*Journal de Trévoux*は記号自体は珍奇なものではないとしながらも、それに対する侯爵夫人の反論の仕方は、「これらはエスプリと一種の真実味とさえいえるものをもって語られている」と誉め、先に引用した、彼女が偉大な学者らと同列に扱われたいと思っているといった文章のすぐあとに、わざわざ次のような一文をつづけているのである。

彼女が述べた、このあとにつづく推論、その話題に熟練している者として反論しているその推論は、彼女の性の愛らしい優雅さのただ中にあっても、洞察力というものを全く失ってはいない<sup>45)</sup>。

この一文はきわめて意味深長である。なぜならこの一文によって*Journal de Trévoux*がいままで誉めてきた彼女の論争のしかたというもの、その推論の立てかた、明晰さ、ものの見方、エスプリ、礼節といったものが、むしろ「女性性」という概念と相入れないと考えていることを露呈しているからである。ワイヨはこのことをたくみな一言でもって表現している。つまり序で引用した、(*Journal de Trévoux*は)「彼女の“オネットーム”な文体とイロニーの繊細さを誉めたのだ<sup>46)</sup>」というものである。実際、礼節を失わず、自分をあからさまに出さず、しかし「堅苦しい態度の敵である、ある自然の優雅さ<sup>47)</sup>」を持っているという点でデュ・シャトレ夫人の返事は、オネットーム(honnête homme)の要件を満たしているといつてよい。しかしもともとこのオネットームという概念は、社交界の男性に対して要求された性質であり、「紳士」などという訳語をあてることもあるくらいである<sup>48)</sup>。*Journal de Trévoux*はオネットームというこの語は使っていないが、ワイヨが見て取ったように、この概念を一つの理想として、デュ・シャトレ夫人とメランの態度の優劣を判断していると考えてよいだろう。だから内容については優劣を決めなくても、文体の点で侯爵夫人に軍配を上げているのである。

にもかかわらず*Journal de Trévoux*は混乱している。というのも、そうやって「オネットームとしてのデュ・シャトレ夫人」を誉めれば誉めるほど、それは夫人を、

彼女の属する「女性」というカテゴリーから遠ざけてしまふからだ。「科学論争におけるオネットームな態度」と「その論者が女であること」をなんとか繋ぎ合わせようとする *Journal de Trévoux* の混乱がこの一文に集約されているといつてよい。つまり単に論争の様式を中立(性)的に誉めただけではデュ・シャトレ夫人の上流社会の女性<sup>49)</sup>としての立場を傷つけることになってしまう。だからわざわざこの一文を入れて夫人をかばわなければいけないのである。

ここから *Journal de Trévoux* がなぜ真つ先にダイヤの比喩を引用したのか、ということの理由が見えてくる。これは雑誌がとりあげたメランの抜粋とも、彼の手紙のオリジナルとも対応しない部分であり、活力論争にほとんど寄与せず、デュ・シャトレ夫人自身も後に削除してしまう部分である。それなのに雑誌の中で大きく取り上げられたのは、編者がこの話題の内にある種の「女らしさ」もあると見なしたからにはほかならない。デュ・シャトレ夫人のダイヤやボンボン飾り好きは有名であり、ヴォルテールもしばしばそれに言及している。それに「デュ・シャトレ夫人の本格的な科学」と「彼女の女らしさ」を結びつけようと苦心し、その好みが「女らしくない」という批判から恋人を守ろうとして、*Journal de Trévoux* 以上に混乱した表現をあちこちに書き残したのは、誰よりもまず、彼ヴォルテールではなかったろうか。ヴォルテールはこうした、ダイヤやちょっとした飾りという「女性を銜学趣味から救うもの<sup>50)</sup>」にしばしば言及して、侯爵夫人の評判に気を配っていた。この論争自体では、自分がニュートン派でメランの友人であることから、恋人の「転向」にとまどっているが、ヴォルテールはずっと以前からこの「両立し得ない」二つの領域を両立させようと苦心してきたのだ<sup>51)</sup>。もし彼女が男だったら、単に「彼」の仕事の誉めてそれで事足りたろう。しかし「女」であるがゆえに、また彼女の「女らしからぬ」野心を知っていればそれだけ、彼女の味方たらんとすれば注意が必要になる。ただ単に、その聡明さ、議論の確かさ、学識の深さを誉めるだけでは足りなかった。加えて彼女が「女らしさ」を保っていることを証明する必要があった。なぜなら本論の始めにも引用したが、この2つの記事の次の号にある、「Article LXVIII」 「デュ・シャトレ家の系図の歴史」のなかのエミリー・デュ・シャトレ夫人の紹介にあるように、彼女の天分は「彼女の性を超えた<sup>52)</sup>」もの——つまり男のもの——だからである。

これは100年の後に、同じフランス人女性であるジョルジュ・サンドを誉めたたええようとした彼女の賛美者が、使う表現にとまどったのと同じとまどいである。文豪であるバルザックもツルゲーネフも、フローベールも誰もかも、グロテスクな印象を与えることなく、この、

決断力と行動力を兼ねそなえていた男装の麗人を讃える表現を産み出すことはできなかった<sup>53)</sup>。デュ・シャトレ夫人は男装をしていたわけではない。しかしサンドの男物の服同様、ずっと男の専売特許と見なされていたものを自分の側にとりこんでいた。それは「女性の天分とは対極にあるもの。真摯さ、広大さ、深さによって、あるいはその恐ろしさによって、そして男性の知性を吸収し満たすものによって女性を惹きつけているようにみえる<sup>54)</sup>」科学研究に対する並々ならぬ情熱と天分であり、具体的にはここに見られるような、科学を主題とした一流の学者との対等な論争に代表される正面切った行動である。それは知的女性の君臨した世紀、18世紀といえどもたやすく受け入れることをためらうような行動であった。

この世紀が受け入れた知的女性とはどのようなものであったかは、ゴンクール兄弟がみごとに要約している。

事実、1700年から1789年まで、女性は単にすべてを動かした豪華な原動力であるばかりではなく、上流階級の力、フランスの思想の女王とも見えるのだ。女性は社会の上層に配置された思想であり、人々の目はこれを見上げ、手はその方に伸ばされる。[...] 18世紀にとって、女性はただ、幸福や快楽や愛の神になりおおせただけでなく、詩的な存在、とりわけ神聖な存在、あらゆる精神高揚の目的、人類の性に具現された人間の理想にみごとになりおおせたのである<sup>55)</sup>。

この美しい要約。ゴンクール兄弟は彼女たちを讃えているつもりなのだ。「脚本を上演させ、文学者の鞆から脚本を引き出し、それらを手直しし、注釈を加え、劇場の委員会や大臣に、国王にさえそれを押しつける<sup>56)</sup>」女性たちを。これは見事な陰の仲介役に対する賞賛であって、創造者に対するそれではない。ひとたび女性が「男性的分野で」表に立った時、この世紀すらその女性を語る言葉を失う。語り手はしどろもどろになり、「男性と同様な」「男性にふさわしい」「その本来の性を超えた」彼女の知性を、力を、行動力を讃えると同時に、彼女の「女らしい」気遣いを、礼節を、たたずまいをたえず強調せずにはいられなかったのであった。

## 5. 結

以上 *Journal de Trévoux* の記事を中心にシャトレ＝メラン論争を見てきた。この分析の中で明らかになったことは、二重の意味で「事実は理論を覆せない」ということであった。

つまり、それが実験結果であれ、科学的な素養のある

女性であれ、具体的な個々の事象を並べてみても、新しい理論は生まれにくいということである。それを生み出すためには、発想の転換、今までの概念のよって立つ前提となるものの変革が必要である。

今、われわれがヘルマンの実験を「読む」時、この完全弾性衝突実験の中で活力（今の定義で言うなら運動エネルギーであるもの<sup>57)</sup>）と運動量（もちろんベクトルとしての）の保存は自明のことであるが、それはわれわれがかつて、活力論争において争点であった様々の事柄を切り捨ててしまった結果でしかない。動力学の法則の形成期であり、形而上学の支えの上になつた自然学というのが、たとえ表面的にはそれに反対した人々の内でさえ、未だ根強い力を持っていたこの時期の知的状況を知らなければ、この論争を理解することはできないだろう。それに、ここではとりあげなかったが、今となってはきわめて奇妙な辻妻合せにしか見えぬ、デュ・シャトレ夫人がことに激しく批判した、メランの力の尺度、「通過しなかった距離」「伸びなかったバネ」「へこまなかった粘土」によって測定される力<sup>58)</sup>といったものも、計算の上ではそれで問題はないのであり、多くの学者らに受け入れられていたということを忘れてはならない<sup>59)</sup>。つまりここでもまた、「実験」は決め手ではなく、あとから確かめるための手段でしかない。

そして後半のジェンダーの混乱の問題は、そのまま生きた現代の問題でもある。われわれは未だこの問題の「決着」を見てはいない。デュ・シャトレ夫人の時代から200年後のキュリー母娘も、同様の事情で人々の間に混乱を与えることになる。いくつかの事例（もはやかなりの事例があるが）では、人々は「女性の本質」なるものの定義を変えようとはしない。18世紀も19世紀も20世紀も、たとえそれぞれの時代、それぞれの地域における「女性の本質」が同一のものでなかったにせよ、「科学的なるもの」と「女性的なるもの」は一貫して互いに排除する概念であると考えられてきた。そして「デュ・シャトレ夫人」や「マリー・キュリー」らの敵対者は、彼女等を「女らしくない」と言うか、あるいは「女性にふさわしく」彼女等の知識は「本物ではない<sup>60)</sup>」と攻撃しつづけ、擁護者は彼女等にも「女らしさがある」とかばいつづけた。それが攻撃であれ擁護であれ、そうしたジェンダーの混乱した表現が、形容された当の本人のアイデンティティーを不安定なものにしつづけたことは間違いない。なぜならどちらの側も、その評価は正反対であるものの、同じ土俵の上立って「デュ・シャトレ夫人」たちを評価してきたからである。

もしも混乱を避けたいのなら、われわれはこれらの表現の裏にある「前提」について考えなければならない。「中立な科学」「実験を基礎に成り立つ科学」とされてい

るものが、何故女性性と対立するものとして位置付けられてきたのか、という歴史的経緯について知る必要があるだろう。

かつてデュ・シャトレ夫人は自著『幸福論』の中で幸福になるための条件として、「美徳、健康、趣味、情熱、幻想」に先立って、まず第一に「偏見をもたないこと<sup>61)</sup>」を挙げた。そしてこの時代の「偏見」が、女を、その唯一の救済手段である学問から遠ざけているのに憤った<sup>62)</sup>。しかし彼女は気付いていたろうか。もしもそれを「偏見」と呼ぶのなら、彼女を守ろうとした男たちもまた、その同じ「偏見」の枠内で彼女を讃えていたということ。

### 註

- (1) "Article LXVI: Lettre de M. de Mairan", *Journal de Trévoux ou Mémoire pour servir à l'histoire des sciences et des arts* (août 1741), pp. 1381-1389; "Article LXVII: Réponse de Madame \*\*\*", *ibid.*, pp. 1390-1402. 以下 "Article LXVI", "Article LXVII" と略す。なお、この雑誌は1968年に Slatkin 社 (Genève) からリプリント版が出ている。
- (2) "Article LXVIII: Histoire généalogique de la Maison du Châtelet", *ibid.*, p. 1439.
- (3) Mme du Châtelet, *Réponse de Madame \*\*\*. à la lettre que M. de Mairan Secrétaire perpétuel de l'Académie Royale des Sciences lui a écrite le 18 février 1741. sur la question des Forces Vives* (Bruxelles, chez Foppens, 1741); Mairan, *Lettre de M. de Mairan Secrétaire Perpétuel de l'Académie Royale des Sciences etc. A Madame \*\*\*. Sur la Question des Forces Vives, en réponse aux Objection qu'elle lui fait sur ce sujet dans ses Institutions de Physique* (Paris, chez Charles Antoine Jombert, 1741). 以下 "Réponse", "Lettre" と略す。また本論でのこの2書簡の引用ページ数は Mme du Châtelet の *Institutions de physique*, 2nd. éd. (Amsterdam, Aux Depense de la Compagnie, 1742) の付録からの引用である。
- (4) R. Vaillot, *Avec Mme Du Châtelet, Voltaire en son temps*, vol.2 (Oxford, Voltaire Foundation, Univ. of Oxford Press, 1988), p.147.
- (5) Descartes, *Principe de la philosophie, Œuvres de Descartes IX-2*, éd. par C. Adam & P. Tannery (Paris, Vrin, 1964), Seconde Partie, 36, p. 83 (訳は三輪正他訳, 「哲学原理」, 『デカルト著作集』, 3 (白水社, 1973) p. 102に従った)。
- (6) Leibniz, "Brevis demonstratio erroris memorabi-

- lis Cartesii et aliorum circa legem naturalem, secundum quam volunt a Deo eandem semper quantitatem motus conservari”, *Acta Eruditorum* (1686), 161-163 (G.M. VI, pp.117-119).
- (7) ライブニッツ, 「ライブニッツとクラークの論争文」, 『ライブニッツ論文集』(園田義道訳, 日清堂書店, 1976)「クラークの第一書簡」より pp.42-43.
- (8) *Ibid.*, 「ライブニッツの第四書簡」, pp.85-86.
- (9) とくにこの活力論争の後半期に関しては P. Costabel, “La signification d’un débat sur trente ans (1728-1758). La question des forces vives”, *Cahier d’histoire et de philosophie des sciences*, n.8 (1983), pp.1-61 を参照。Costabel は動力学の法則が整備されてゆく中で, 運動する物体の力の測定法という問題について当時の学者らのこの問題に対するとらえかたがどう変ってゆくかを明快に解説している。
- (10) バリのアカデミーが行った極地探検のことである。このころヨーロッパでは地球の形状に関して2つの理論があった(デカルトの渦動, ニュートンの万有引力より導きだされる2つの異なった地球の形状)。このどちらが正しいかを調べるために1735,36年にアカデミーはペルーとラブランドに行く2つの調査隊を組織した。ラブランドの方の隊長はデュ・シャトレ夫人やヴォルテールの友人であったモーベルテュイであり, 同年に帰国した彼が極地より持ち帰ったデータは, 数々の批判に遭遇したが, ニュートンの万有引力の勝利を決定的なものにした。
- (11) R. Vaillot, *op.cit.* (注4), pp.84-85.
- (12) C. Iltis, “The Decline of Cartesianism in Mechanics; The Leibnizien-Cartesien Debates”, *Isis*, vol.64 (1973), p.370.
- (13) 活力論争におけるデュ・シャトレ夫人の位置については拙稿 K. Kawashima, “La Participation de Madame du Châtelet à la Querelle des Forces Vives”, *Historia Scientiarum*, n.40 (1990), 9-28 を参照。
- (14) R. Hahn, *The Anatomy of a Scientific Institution; The Paris Academy of Sciences, 1666-1803* (Berkeley, Los Angeles, London, Univ. of California Press, 1971) p.63. またそれだけでなく, ジェズイットから見れば *Journal des savants* はジャンセニスト寄りだと判断していた。
- (15) “Préface”, *Journal de Trévoux*, n.1 (1701), s.p.
- (16) それぞれ Mme du Châtelet, “Réponse”: 1) pp.515-516; 2) pp.517, 521-522; 3) pp.527-529, 531-532. “Article LXVII”: 1) pp.1391-1393; 2) pp.1394-1397; 3) pp.1397-1402 である。
- (17) 上と同様 Mairan, “Lettre”: 4) pp.486-488; 5) pp.493-495, 497; 6) p.499. “Article LXVI”: 4) pp.1383-1384; 5) pp.1386-1389; 6) p.1389.
- (18) Mme du Châtelet, *Institutions de physique* (Paris, Prault, 1740), pp.435-436.
- (19) “Article LXVI”, pp.1382-1383.
- (20) メランは繰り返しデュ・シャトレ夫人が活力の計算に際して速さを二乗せず2倍していると指摘しており, 雑誌の記事も手紙のこの部分を取りあげている。*Ibid.*, p.1383.
- (21) *Ibid.*, p.1385.
- (22) “Article LXVII”, p.1398.
- (23) *Ibid.*, pp.1399-1400.
- (24) *Ibid.*, p.1400; “Réponse”, p.529.
- (25) “Article LXVII”, p.1401.
- (26) Mairan, “Dissertation sur l’estimation & la mesure des forces motrices des corps”, *Mémoire de l’Académie Royal des Sciences* (1728), 1-49.
- (27) P. Costabel, *op.cit.* (注9), p.47.
- (28) ただし, ここでの実験はどちらかという思考実験に近い。というのも厳密に言うなら, この時代に完全な真空の中や, まったく摩擦のない台の上で, 完全弾性衝突実験を行うなどということはできたはずがないからである。したがって与えられた数値は言葉通りの意味での「実験データ」ではない。
- しかし上記の条件をつくることが可能であったにしても, この時点では双方が自分の立場のみの正当性を主張したであろうことは明らかである。
- (29) 伊東俊太郎, 原亨吉, 村田全, 『数学史』(筑摩書房, 1975), pp.400-401. ここは村田の担当部分である。
- (30) R. Vaillot, *op.cit.* (注4), p.147.
- (31) メランの手紙の日付が1741年2月18日であることが周知の前提になっている。
- (32) “Article LXVII”, p.1390.
- (33) Mme du Châtelet, Lettre à Maupertuis, le 8 août 1741, Lettre 274, *Les lettres de la marquise du Châtelet*, éd. par T. Besterman (Genève, Institut et Musée de Voltaire, 1958), vol.2, p.63. ここでデュ・シャトレ夫人は, メランが常任書記だからアカデミーが雑誌に沈黙を命じている, つまりこれは陰謀だと思っている。これは全く見当はずれの批判ではない。アカデミーは当時十分それだけの権力を持っていたのであり, やはりアカデミー会員のレオミュールを批判したという理由で, *Journal de Trévoux* に圧力をかけたことがあった。この時代, あらゆる科学的発明の特許をその手に握り, 科学の書物の検閲を行っていた王立科学アカデミーの権力は絶大だったのである。cf., R. Hahn, *op.cit.* (注14), pp. 64-65.

- (34) "Article LXVII", p.1401.
- (35) *Ibid.*, pp. 1390-1391.
- (36) Mme du Châtelet, Lettre à d'Argental, le 2 mai 1741, Lettre 269, *Les lettres de la marquise du Châtelet*, *op.cit.* (注33), vol.2, p.50.
- (37) "Article LXVII", p. 1391.
- (38) "Ridendo dicere verum quid vetat?", *Ibid.*, p.1392; "Réponse", p.515 (Horatius, Sermones 1.1.25).
- (39) "Article LXVII", pp.1392-1393.
- (40) *Ibid.*, p. 1394.
- (41) 次の2冊の本の付録としてメランと自分の手紙をのせている。ページ数は手紙の部分である。Mme du Châtelet, *Institutions de physique*, *op.cit.* (注3を参照), pp. 476-542; *Dissertation sur la nature et la propagation du feu* (Paris, Prault, 1744), pp. 1-38, 1-37.
- (42) ヨハン・ベルヌイⅡやフリードリヒ大王らに送ったという手紙が残っている。Mme du Châtelet, *Les lettres*, *op.cit.* (注33), vol.2 : lettre à Bernoulli, le 30 mai 1744, lettre 322, p. 116; lettre à Frédéric II, le 30 mai 1744, lettre 323, p.117.
- (43) "Réponse", p.516.
- (44) *Ibid.*, p.516.
- (45) "Article LXVII", p.1401.
- (46) R. Vaillot, *op.cit.* (注4), p.147.
- (47) V.L. ソーニエ, 『17世紀フランス文学』, 文庫クセジュ346 (小林善彦訳, 白水社, 1958), p.55.
- (48) たとえば野沢協はP.アザールの『ヨーロッパ精神の危機』(法政大学出版局, 1973)で *honnête homme* に紳士という訳語を当てはめている。*Ibid.*, p. 399.
- (49) ここでは女性といっても総ての階級の女性について考えているわけではない。「女らしさ」などというものを当てはめられるのは上, 中流の女性に対してだけであった。下層階級は男女を問わず, 問題にされていなかった。
- (50) E. & J. Goncourt, *Les femmes au XVIIIe siècle*, (Paris, Flammarion, 1982), p.336. 訳文は鈴木豊訳『ゴンクールを見た18世紀の女性』(平凡社, 1994)によった (p.449)。
- (51) E. Badinter, *Émilie Émilie ou l'ambition féminine au XVIIIe siècle*, (Paris, Flammarion, 1981-2e éd. Flammarion, 1984), pp. 89-91. ここでは第2版を使用した。また非常に面白い例として高橋安光『ヴォルテールの世界』(未来社, 1979)のp.76のデュ・シャトレ夫人についての解説などがある。ここでは著者はヴォルテールと同様に, *Journal de Trévoux* と同じ視点で, 真剣にデュ・シャトレ夫人の女性性をかばおうとして, 夫人の女らしさを強調している。
- (52) 注2を参照。
- (53) C. ハイルブラン, 『女の書く自伝』(大社淑子訳, みすず書房, 1992), pp.36-40.
- (54) J. & E. Goncourt, *op.cit.* (注50), p.325 (和訳 pp.391-392).
- (55) *Ibid.*, p.310 (和訳 p.371).
- (56) *Ibid.*, p.310 (和訳 p.371).
- (57)  $mv^2$  の前に  $1/2$  をつけて今の形にしたのはコリオリである。
- (58) Mairan, "Dissertation", *op.cit.* (注41), pp.48-49.
- (59) ヴォルテールはもちろん, カントがメラン支持をはっきり打ちだしたことは有名である。E. Kant, "Gedanken von der wahren Schatzung der lebendigen Kräfte", in *Immanuel Kants Werke*, vol.1, E. Cassirer ed. (Berlin, 1922), pp.1-187でカントは長々とメランを誉め, デュ・シャトレ夫人を批判している。
- (60) これがよくあらわれているのはデファン夫人によるデュ・シャトレ夫人の人物描写である。E. Badinter, *op.cit.* (注51), pp.467-468.
- (61) Mme du Châtelet, *Discours sur le bonheur*, éd. par R. Mausl (Paris, les Belles lettres, 1961), p.4.
- (62) Mme du Châtelet, "Préface du traducteur de la 'Fable of the Bees' de Mandeville", *Studies on Voltaire With Some Unpublished Papers of Madame du Châtelet* par I.O. Wade (Princeton, New Jersey, Princeton Univ. Press, 1947), p. 633.